

3.4 [土]	千葉特別演奏会 千葉県文化会館／15時開演 Special Concert in Chiba Saturday, 4th March, 15:00 / Chiba Prefecture Culture Hall
---------	--

指揮／尾高忠明 (名誉客演指揮者) Honorary Guest Conductor TADAAKI OTAKA **P.5**
 ピアノ／仲道郁代 Piano IKUYO NAKAMICHI **P.7**
 コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

スメタナ 連作交響詩〈我が祖国〉より“モルダウ” [約12分] **P.9**
 SMETANA / Vltava from “Má Vlast”

シューマン ピアノ協奏曲 イ短調 作品54 [約31分] **P.9**
 SCHUMANN / Piano Concerto in A minor, op. 54
 I. Allegro affettuoso
 II. Intermezzo : Andantino grazioso – III. Allegro vivace

[休憩 Intermission]

ディーリアス 楽園への道 [約8分] **P.10**
 DELIUS / The Walk to the Paradise Garden

エルガー 行進曲〈威風堂々〉 作品39 第1番 ニ長調 [約5分] **P.10**
 ELGAR / March “Pomp and Circumstance”, op. 39 No. 1, D major

シベリウス 悲しきワルツ [約6分] **P.11**
 SIBELIUS / Valse triste

ラヴェル ボレロ [約13分] **P.11**
 RAVEL / Boléro

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団、千葉県文化振興財団
 [後援] 千葉市文化振興財団

3.9 [木]	非破壊検査 Presents 第16回 大阪定期演奏会 フェスティバルホール／19時開演 Subscription Concert in Osaka, No. 16, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd Thursday, 9th March, 19:00 / Festival Hall
3.10 [金]	鳥取特別演奏会 とりぎん文化会館梨花ホール／19時開演 Special Concert in Tottori Friday, 10th March, 19:00 / Tottori Prefecture Citizens' Culture Hall
3.11 [土]	名曲シリーズ 福岡公演 福岡シンフォニーホール／18時開演 Popular Series in Fukuoka Saturday, 11th March, 18:00 / Fukuoka Symphony Hall

指揮／下野竜也 (首席客演指揮者) Principal Guest Conductor TATSUYA SHIMONO **P.6**
 ヴァイオリン／アレクサンドラ・スム Violin ALEXANDRA SOUMM **P.7**
 コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

モーツァルト ヴァイオリン協奏曲 第3番 ト長調 K. 216 [約24分] **P.12**
 MOZART / Violin Concerto No. 3 in G major, K. 216
 I. Allegro
 II. Adagio
 III. Rondo : Allegro

[休憩 Intermission]

ブルックナー 交響曲 第7番 ホ長調 (ハース版) [約64分] **P.13**
 BRUCKNER / Symphony No. 7 in E major (Haas edition)
 I. Allegro moderato
 II. Adagio. Sehr feierlich und sehr langsam
 III. Scherzo : Sehr schnell
 IV. Finale : Bewegt, doch nicht schnell

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、日本海テレビ (3/10)、FBS 福岡放送 (3/11)
 読売日本交響楽団
 [共催] 鳥取県文化振興財団 (3/10)、アクロス福岡 (3/11)
 [特別協賛] 非破壊検査株式会社 (3/9)
 [後援] 福岡市、福岡市教育委員会 (3/11)
 [協力] 北九州・筑豊京築・福岡東部・福岡西部・福岡南部・筑後各読売会 (3/11)

3.18 [土]	第195回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 195 Saturday, 18th March, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
3.19 [日]	第195回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 195 Sunday, 19th March, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
3.20 [月・祝]	第94回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 94 Monday, 20th March, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／下野竜也 (首席客演指揮者) Principal Guest Conductor TATSUYA SHIMONO P. 6

ヴァイオリン／三浦文彰 Violin FUMIAKI MIURA P. 8

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

パッヘルベル カノン [約5分] P.15
PACHELBEL / Canon

フィリップ・グラス ヴァイオリン協奏曲 第1番 [約30分] P.16
PHILIP GLASS / Violin Concerto No. 1

I. ♩ = 104
II. ♩ = ca. 108
III. ♩ = ca. 150

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 小短調 作品95 〈新世界から〉 [約40分] P.17
DVOŘÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"

I. Adagio - Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[協賛] NTT コミュニケーションズ株式会社 (3/18)

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業) (3/18、19)

[事業提携] 東京芸術劇場 (3/18、19)

[協力] 横浜みなとみらいホール (3/20)

尾高忠明

(名誉客演指揮者)

Tadaaki Otaka

ベテランの腕が冴える
珠玉の名曲の数々



©浦野俊之

読響の常任指揮者 (1992～98年) を経て、現在は名誉客演指揮者を務めるベテランが、スメタナやラヴェルの名曲に、得意とするエルガーなど英国ものを交えたプログラムで腕を振るう。ピアノの仲道郁代と共演するシューマンの協奏曲も楽しみだ。

1947年鎌倉生まれ。桐朋学園大学で齋藤秀雄に師事し、70年に第2回民音指揮者コンクールで第2位に入賞。オーストリア政府から奨学金を得てウィーン国立アカデミーに留学し、指揮をスワロフスキーに、オペラ指揮法をシュパンナーゲルに学んだ後、東京フィル常任指揮者 (74～91年／現桂冠指揮者) に就任。BBC ウェールズ響首席指揮者 (87～95年／現桂冠指揮者) を務めエルガーやブリテンなどのイギリス音楽を手がけた。

紀尾井シンフォニエッタ東京ミュージカル・アドバイザー／首席指揮者 (95～

2000年／現桂冠名誉指揮者)、札幌響音楽監督 (04～15年／現名誉音楽監督)、メルボルン響首席客演指揮者 (10～12年)、新国立劇場オペラ芸術監督 (10～14年) を歴任。名実ともに日本を代表する指揮者として活躍している。客演指揮者としては、国内の主要オーケストラはもちろんのこと、ロンドン響、BBC響、ベルリン放送響など、世界各地のオーケストラを指揮している。また、東京芸術大学名誉教授、相愛大学、京都市立芸術大学音楽学部客員教授、国立音楽大学 ^{しょうへい} 招 聘 教授を務めている。

◇ 3月4日 千葉特別演奏会

下野 竜也

(首席客演指揮者)

Tatsuya Shimono

いよいよ大団円へ！
有終の美を飾るマエストロ

正指揮者から首席客演指揮者へと、10年あまりにわたって読響と共に歩んできたマエストロが、いよいよ今月をもって退任する。有終の美を飾るプログラムは、ブルックナーとドヴォルザークの交響曲をメインに、若きヴァイオリニスト二人を迎えてモーツァルトとフィリップ・グラスの協奏曲で彩りを添える。

1969年鹿児島生まれ。鹿児島大学教育学部音楽科、桐朋学園大学音楽学部附属指揮教室、イタリア・シエナのキジアーナ音楽院で学んだ後、大阪フィルの指揮研究員となり、朝比奈隆氏ら巨匠たちの薫陶を受けた。文化庁派遣芸術家在外研修員としてウィーン国立演劇音楽大学に留学中、2000年の東京国際音楽コンクールと01年のブザンソン国際指揮者コンクールで優勝を飾った。

国内の主要オーケストラはもとより、チエコ・フィル、シュトゥットガルト放送響、



©読響

ローマ・サンタチェチーリア管などと共演し、国際的に活躍している。また、出光音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞、新日鉄音楽賞・フレッシュアーティスト賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣賞、東燃ゼネラル音楽賞洋楽部門奨励賞など受賞も数多い。14年9月には読響とカレル・フサの〈この地球を神と崇める〉を日本初演し、読響をミュージック・ペンクラブ音楽賞受賞に導いた。

- ◇ 3月9日 大阪定期演奏会
- ◇ 3月10日 鳥取特別演奏会
- ◇ 3月11日 名曲シリーズ 福岡公演
- ◇ 3月18日 土曜マチネシリーズ
- ◇ 3月19日 日曜マチネシリーズ
- ◇ 3月20日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

A rtist of the month

今月のアーティスト



©Kiyotaka Saito

ピアノ 仲道郁代

Piano Ikuyo Nakamichi

国内外での受賞を経て1987年ヨーロッパと日本で本格的にデビュー。

デビュー30周年を迎える2016/2017シーズンは、ゲヴァントハウス弦楽四重奏団、ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団との各地で共演した他、全国各地での記念リサイタル、CDリリース、演劇とのコラボレーションなどが進行している。また、子どもたちと音楽の幸せな出会いをめざし、演奏とトークに映像を交えた「不思議ボール」プロジェクトのほか、各地のホールや学校でワークショップなども実施している。

<http://www.ikuyo-nakamichi.com>

- ◇ 3月4日 千葉特別演奏会



©Béatrice Cruveiller

ヴァイオリン アレクサンドラ・スム

Violin Alexandra Soumm

ロシア生まれ。5歳でヴァイオリンを始め、ウィーンで本格的に学んだ。2004年にユーロヴィジョン・コンクールで第1位を獲得。現在はパリを拠点に、パリ管やイスラエル・フィル、ロンドン・フィル、ベルリン・ドイツ響などと共演を重ねている。また、13年1月に創設された「エル・システム・フランス」で後進の指導にもあたっている。

読響との共演は2度目となる。使用楽器はロンドン・ミュージック・マスター・アワード受賞の一部として、同地のフローリアン・レオンハルト商会から貸与されているG. B. ガダニーニ (1785年製)。

- ◇ 3月9日 大阪定期演奏会
- ◇ 3月10日 鳥取特別演奏会
- ◇ 3月11日 名曲シリーズ 福岡公演



©Yuji Hori

ヴァイオリン 三浦文彰

Violin Fumiaki Miura

2009年にハノーファー国際ヴァイオリンコンクールにおいて史上最年少(16歳)で優勝し、大きな注目を集めた。ウィーンでパヴェル・ヴェルニコフ、ジュリアン・ラクリンに師事。国内の主要オーケストラのほか、ハンブルク北ドイツ放送響、シュトゥットガルト放送響、プラハ・フィルなどと共演している。またCDはベルリン・ドイツ響と録音したチャイコフスキー、メンデルスゾーン協奏曲などがエイベックスから出ている。

使用楽器は、宗次コレクションより貸与された1704年製作ストラディヴァリウス“Viotti”である。

◇ 3月18日 土曜マチネーシリーズ

◇ 3月19日 日曜マチネーシリーズ

◇ 3月20日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

3.4 [土]

道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

スメタナ

連作交響詩〈我が祖国〉より“モルダウ”

“モルダウ”は、チェコの国民楽派を代表する作曲家、ベドルジハ・スメタナ(1824~84)が1879年に完成させた連作交響詩〈我が祖国〉(全6曲)の第2曲。音楽は八つの部分からなる。二つの水源をもつヴルタヴァ(モルダウのチェコでの呼称)。二つの水源はやがて合流し、1本の大河となる。河岸から聞こえる狩りの角笛や婚礼の踊

りの音楽、激しく飛び散る水しぶきや川の流れる様子、そして曲の終わりに現れる城など、チェコの自然や人々の営みが音楽に映し出されている。有名なモルダウの主題を最初に奏でるのは、ヴァイオリンとオーボエである。

ちなみに、連作交響詩〈我が祖国〉の全曲初演は1882年。スメタナの祖国への思いを鮮烈に表現した作品である。

シューマン

ピアノ協奏曲 イ短調 作品54

ロベルト・シューマン(1810~56)はドイツ・ロマン派を代表する作曲家。彼の作曲の特徴の一つとして、その時期ごとに特定のジャンルに創作が集中していることがあげられる。1830年代にはピアノ作品、1841年には管弦楽曲、そして42年には室内楽曲が多く手がけられた。

1841年に完成した〈ピアノと管弦

楽のための幻想曲〉は、のちにピアノ協奏曲作品54の第1楽章となる。44年のロシアへの演奏旅行の頃から、心身ともに疲労のピークに達したシューマンは、翌年に療養を兼ねて住み慣れたライプツィヒからドレスデンへ移住。その地で残りの二つの楽章を作曲した。そして、46年にピアノ協奏曲作品54としてライプツィヒのゲヴァ

シベリウス 悲しきワルツ

フィンランド生まれのジャン・シベリウス（1865～1957）はドイツへ留学し、ドイツ・ロマン派の音楽を自らの作品に取り入れてゆく。しかし同時に、自国の音楽に改めて目を向けるようになった。その背景には、国民主義の運動がある。1899年にはロシアからの弾圧に抵抗する意を込めて交響詩〈フィンランディア〉を完成させ、彼の創作の方向性を決定づけた。

1903年、シベリウスは義兄イェルネフェルトによる戯曲『クオレマ(死)』（全3幕）の付随音楽を書き上げた。その中の第1曲を編み直したシベリウスは、翌年4月に〈悲しきワルツ〉として自らの指揮で披露した。彼はこの戯曲のために6曲を作曲しているが、〈悲しきワルツ〉はアンコールピースとして頻繁に演奏されている。

ラヴェル ボレロ

〈ボレロ〉は、近代フランスの作曲家モーリス・ラヴェル（1875～1937）が1928年に作曲したバレエ音楽。舞踏家イダ・ルビンシテインの委嘱^{いしよく}によるもので、同年11月22日に行われた彼女のバレエ団のパリ・オペラ座での公演で初めて演奏された。

ボレロとは、スペインの民俗舞踊。このバレエの物語の舞台は、スペインのセビリア地方の小さな酒場。脚慣らしをしていた踊り子のステップは徐々に熱を帯びてゆき、最後には全員が夢中になって踊る様子が描かれている。

その過程は、弱音から強音までの一貫したクレッシェンドで示されている。音楽は、小太鼓によるボレロのリズムに始まり、小太鼓は曲の終わりまでこのリズムを叩き続けてゆく。曲の終盤まで転調をとまわず、一筋のクレッシェンドとともに淡々と反復するリズムと二つの主題による音楽は、最後にエネルギーを爆発させ、劇的なフィナーレを形成する。ラヴェルのオーケストレーションの極意が発揮された音楽である。

ントハウスで、妻クララのピアノにより初演された。なだれ落ちるようなピアノ・パートに始まる第1楽章。その後、木管楽器が憧れに満ちた第1主

題を静かに奏でる。甘美な雰囲気にも包まれた第2楽章に続き、第3楽章は華やかでドラマティックなピアノ・パートが印象に残る。

ディーリアス 楽園への道

フレデリック・ディーリアス（1862～1934）は、エルガーと同じ世代の作曲家である。イギリス生まれであるが、渡米しフロリダで果樹園を営んでいた。しかし音楽への情熱を捨てきれず、ライプツィヒ音楽院に学んだ後、パリへ移り住んだ。彼の音楽にはフランスの印象主義の影響も見られ、コスモポリタ的な性格が備わっており、〈楽園への道〉にもそのような特徴が

感じられる。

〈楽園への道〉は、1901年に書き上げられた彼のオペラ〈村のロミオとジュリエット〉のなかの間奏曲。スイスの作家ケラーの小説をもとにしたこのオペラは、この世で結ばれぬ二人の恋が描かれている。07年にベルリンのコーミッシェ・オーバーで初演されたのち、指揮者ビーチャムが管弦楽の小品に編み直した。

エルガー 行進曲〈威風堂々〉 作品39 第1番 ニ長調

20世紀前期に活躍したイギリスの作曲家、エドワード・エルガー（1857～1934）。本格的な音楽の勉強を望んでいたものの、家庭の事情で果たすことはできなかった。しかし、独学で音楽のキャリアを積み重ね、1888年に〈愛の挨拶〉を作曲。地道な創作活動が続け、99年に完成した〈エニグマ変奏曲〉によって彼の名は広く知られるようになった。

1901年作曲の〈威風堂々〉第1番も、彼の代表作の一つで、同年に初演された。ニ長調の中間部（トリオ）に現れるゆったりとした旋律は、02年に作曲された合唱曲〈戴冠式頌歌^{たいかんしきしょうか}〉に用いられている。英語のタイトル「Pomp and Circumstance」は、シェイクスピアの戯曲『オセロ』のセリフに由来する。ちなみに、完成した〈威風堂々〉は第5番までである。

3.9 [木]

3.10 [金]

3.11 [土]

飯尾洋一 (いいお よういち)・音楽ライター

モーツァルト

ヴァイオリン協奏曲 第3番 ト長調 K.216

作曲：1775年／初演：不明／演奏時間：約24分

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756～91) が生きた時代、作曲家はもっぱら自ら楽器を演奏し、自作を演奏していた。たとえば、ウィーンで活躍したモーツァルトは、独奏者として自身のピアノ協奏曲を演奏し、人気を博していたのである。モーツァルトは作曲家であると同時に、ピアニストでもあった。

しかし、モーツァルトがウィーンで評判を呼ぶ以前、彼は故郷のザルツブルクで宮廷楽団に雇われていた。ここでの役割はヴァイオリニスト。つまり、モーツァルトはピアノにもヴァイオリンにもプロフェッショナルな腕前を持っていたことになる。

モーツァルトの父レオポルトは、息子に対してこんな手紙を書いたことがある。「お前は自分がヴァイオリンをどんなにうまく弾くのか知らないのだ。当代随一のヴァイオリニストのつ

もりで弾くなら、決してぞんざいに弾いてはならない。子供のころからピアニストとして知られたお前が、ヴァイオリンも弾くことなど、多くの人は考えたこともないだろう」。モーツァルトは本人が思う以上に名ヴァイオリニストだったのかもしれない。

ヴァイオリン協奏曲第3番の作曲は1775年、ザルツブルクにて。10代の終わりを飾る若き日の傑作である。

第1楽章 アレグロ 愛らしい主題で開始され、快活で流麗な楽想が続く。

第2楽章 アダージョ 弱音器付きの弦楽器に支えられて、独奏ヴァイオリンがのびやかな主題を奏でる。

第3楽章 ロンド、アレグロ 宮廷舞曲風の典雅な主題で始まり、次々と表情が移り変わる。意外性に富んだ展開の後、冒頭主題が回帰する。ふわりと着地するような、さりげない曲の閉じ方がおしゃれ。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、ホルン2、弦五部、独奏ヴァイオリン

ブルックナー
交響曲 第7番 ホ長調 (ハース版)

作曲：1881～83年／初演：1884年12月30日、ライプツィヒ／演奏時間：約64分

昨年、『不機嫌な姫とブルックナー団』(高原英理著／講談社)という小説が刊行されて、一部の音楽ファンの間で話題を呼んだ。アントン・ブルックナー (1824～96) の交響曲が演奏されるコンサートにひとり足を運んだ主人公の女性が、筋金入りのブルックナー・マニアを自任する3人組の男性に声をかけられる。主人公は3人組との交流を通じて作曲家ブルックナーの人生の歩みと人物像への興味を深めながら、自らの生き方を問い直す……といった物語である。小説内には登場人物が書いたという設定でブルックナー伝が挿入され、この作曲家がいかにも不器用に人生を歩んだかが描かれている。

こういった小説が成立するのも、ブルックナーが多くの大作曲家とは異なる特異な道を歩んできたからこそだろう。神童伝説で名を馳せたり、若くして国際的な名声を手にするといった華やかな成功譚とは無縁の作曲家がブルックナー。ほかの多くの大作曲家たちが10代、20代のうちに代表作となる作品をいくつも残しているのに対し、ブルックナーが交響曲第1番を書きあげたのはようやく40代になってから。モーツァルトやシューベルトのような短

命な作曲家であればすでに生涯を閉じている年齢で、ようやくブルックナーは本格的な第一歩を記したことになる。

生前のブルックナーが音楽界でその才能にふさわしい栄誉をなかなか手にすることができなかったのは、ウィーンの音楽界に絶大な影響力を持っていた評論家エドゥアルト・ハンスリックの影響も大きい。ワーグナーへの心酔を隠そうともしないブルックナーに対して、反ワーグナーの急先鋒であったハンスリックはその作品をたびたび厳しく批判した。またウィーン大学講師のポストを求めるブルックナーに対して、同大学の音楽学教授の立場から請願を却下している。「わたしが破滅させようと思う人間は、きっと破滅するだろう」とはハンスリックのモットー。ブルックナーにとって、ハンスリックは恐怖の源であった。

しかし、そんなブルックナーが、ついに真の大成功を収めたのが、今回演奏される交響曲第7番である。弟子たちの尽力もあり、作品の真価を見抜いた名指揮者アルトゥール・ニキシュが、ライプツィヒでこの交響曲を初演することを引き受けたのである。ニキシュは「ベートーヴェン以来、これに

3.18 [土]

3.19 [日]

3.20 [月・祝]

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

パッヘルベル

カノン

作曲：1680年頃／初演：不明／演奏時間：約5分

ヨハン・パッヘルベル（1653～1706）は、バッハ以前の、ドイツのオルガン音楽の最も重要な作曲家のひとりである。中部ドイツのニュルンベルクに生まれ、アルトドルフ、レーゲンスブルクで教育を受けた後、20歳でウィーンの聖シュテファン大聖堂の副オルガニストとなった。1678年、エアフルトの伝道者教会のオルガニストに就任し、この頃から創作活動も手がけるようになる。ここではバッハの父親やその親族と知り合い、バッハの長兄ヨハン・クリストフを指導した。

シュトゥットガルトとゴータの宮廷オルガニストを経て、1695年からニュルンベルクの聖ゼーバルト教会のオルガニストを務め、当代最高の奏者と評価された。彼のオルガン曲は当時から高い人気を集め、礼拝用オルガン曲をはじめ、宗教的声楽曲や室内楽曲等を多数作曲した。近年は、彼の作品研

究も進み、プロテスタント教会音楽の作曲家として再評価されている。

「パッヘルベルのカノン」として、弦楽合奏はじめ様々な編曲で知られるこの曲は、長らく彼のエアフルト時代の1680年頃に作曲されたと考えられてきた。しかし、最近の研究では、弟子のヨハン・クリストフの結婚式のために書かれ、1694年10月23日にアルドルフでバッハ・ファミリーによって初演されたとの指摘もあり、作曲に関する詳細は不明である。

原題は、〈3つのヴァイオリンと通奏低音のためのカノンとジグ〉で、軽快なジグと一対の作品として作られた。カノンは、三つのヴァイオリン・パートが全く同じ旋律を2小節ずつずらして演奏し、通奏低音（バロック時代の合奏音楽の低音声部で、チェロやチェンバロ等の楽器が担当）による2小節のバス主題が28回繰り返される。

近づくことさえできた作品はなかった」「今このときから、ブルックナーの名を高めるために尽力することこそが私の使命となった」と作品を激賞している。

1884年の初演を前に、ブルックナーはニキシュに対し、「作品が失敗に終わったら、夜の闇にまぎれて立ち去ります」と手紙に記しているが、これは杞憂であった。演奏は大成功に終わり、15分にわたって止むことのない拍手が続いたという。この交響曲はさらに翌年3月、ミュンヘンでもヘルマン・レーヴィによって指揮され、ここでも客席から嵐のような喝采が寄せられた。

60代にしてようやく真の名声を獲得できた背景には、ニキシュの慧眼^{けいがん}があったことはもちろんだが、同時にこの作品が広く聴衆の心をつかむために必要な明快さを持っていたこともまた事実だろう。大交響曲としての威容を誇る一方で、四つの楽章には極端に長大な楽章がなく、全編にわたってみずみずしい旋律にあふれ、構築美と叙情性が無理なく作品に共存している。

第1楽章 アレグロ・モデラート
ブルックナーのトレードマークともいべき弦楽器のかすかなトレモロで開始され、チェロがのびやかな第1主題を

奏でる。第2主題がオーボエとクラリネットで導かれ、力強い総奏の後に第3主題が登場する。三つの主題によるソナタ形式もブルックナーの大きな特徴である。入念で輝かしい終結部が用意される。

第2楽章 アダージョ 敬愛するワーグナーの死を予感しつつ書かれたと言われ、冒頭でワーグナーチューバを中心に厳粛な主題を奏でる。終盤のクライマックスでは、ティンパニとトライアングル、シンバルが加わって劇的効果を高める。この部分は自筆譜に「無効」の指示があることから、その筆跡や意図を巡って楽譜の版により判断が分かれる。ハース版ではこれら打楽器を採用していないが、今回の演奏では指揮者の判断により採用される。静かに楽章を閉じる終結部は、ワーグナーのための葬送の音楽。

第3楽章 スケルツォ 野趣あふれる豪快なスケルツォの間に、幻想的なトリオがはさまれる。トランペットの冒頭主題は雄鶏の鳴き声から着想されと言われる。

第4楽章 フィナーレ 弾むような軽快な第1主題で開始され、穏やかな第2主題、激しい総奏による第3主題が順次登場し、雄大なフィナーレを築きあげる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ワーグナーチューバ4、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、弦五部

楽器編成／ヴァイオリン、チェロ、コントラバス、オルガン

フィリップ・グラス ヴァイオリン協奏曲 第1番

作曲：1987年／初演：1987年4月5日、ニューヨーク／演奏時間：約30分

今年1月、アメリカのフィリップ・グラス（1937～）の生誕80年を祝うコンサートがニューヨークのカーネギー・ホールで開かれ、最新作、交響曲第11番（2016）が世界初演された。グラスは、スティーヴ・ライヒやテリー・ライリーらと並ぶミニマル・ミュージック（極度に切り詰めた音素材でパターン化された音型やリズム型を反復して構成する音楽）を代表する作曲家で、非常に多くの作品を書いている。

ボルティモアに生まれたグラスは、シカゴ大学を経てジュリアード音楽院に進み、パリに留学してナディア・ブーランジェに師事した。パリでは映画音楽の仕事でインドのシタール奏者ラヴィ・シャンカールと知り合い、非西洋的な音楽に関心を向けるようになる。インドやチベットにも足を運び、決定的な影響を受けた。そこからインド音楽の加算的なリズム法や循環構造に着目し、そこに反復を取り入れた独自のミニマル手法を編み出した。

1967年にニューヨークに戻ると、自作を演奏するアンサンブルを結成し、パターンを規則的に加えて反復する音

楽に着手する。そして、演出家のロバート・ウィルソンとの共同作業によるオペラ〈浜辺のアインシュタイン〉（1976）の成功で注目を集めたことで、舞台作品を数多く手がけた。さらに交響曲や協奏曲にその手法を拡大させ、また『美女と野獣』『ドラキュラ』など古い映画をリメイクする映画オペラなど、多岐にわたる創作活動が続いている。

グラスは、現在まで2曲のヴァイオリン協奏曲を書いている。「アメリカの四季」とタイトルの付いた第2番（2009）と、彼にとって初めての管弦楽作品となった第1番で、これは現代曲の演奏家として知られるポール・ズーコフスキーの勧めと助言を得て作曲された。

当初は5楽章構成も考えたが、全体は伝統的な3楽章構成で、中庸なテンポの**第1楽章**は、反復のなかに独奏ヴァイオリンとオーケストラの対比がみられる。**第2楽章**は、オーケストラの低音の下行音型がゆるやかに反復され、ヴァイオリンが静かで哀しげな旋律を歌う。**終楽章**は、急速なテンポで執拗に反復が続けられ、ズーコフスキーの助言で最後にゆるやかなコーダが付けられた。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、バス・クラリネット（エス・クラリネット持替）、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（太鼓、小太鼓、ウッドブロック、トライアングル、シンバル）、ハープ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分

チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）は、1892年にニューヨークのナショナル音楽院の初代院長に就任するために、家族を伴って渡米した。大都会の喧騒や冬の厳しさに戸惑いながらも、新しい土地で知った黒人霊歌やアメリカ先住民の歌や民謡に触れるうちに、新たな創作意欲をかきたてられた。彼の最後の交響曲となった第9番は、アメリカ滞在中に作曲された他の作品と同様、アメリカ的な要素とボヘミアへの郷愁の思いが結びつけられた。

この交響曲は、1893年1月の最後の3週間で第1楽章から第3楽章までのスケッチが終わり、5月24日に全曲が完成した。中間の二つの楽章は、ロングフェローの長編物語詩『ハイアワサの歌』から着想を得た。偶然チェコ語の翻訳本を手に入れたドヴォルザークは、アメリカ先住民の精神的英雄を扱ったこの物語詩に夢中になった。「森の葬式」「インディアンの儀式的踊り」といった自然や人間の深い感情に分け入るような詩を通して、自身の故郷の風景を懐かしみ、ボヘミアへの熱い思

いをいっそう募らせたのである。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・モデラート、ホ短調 ゆるやかな序奏に続いて、力強い主部ではホルンの鋭いリズムが特徴的な第1主題が示される。フルートとオーボエのボヘミアのポルカを思わせる主題や、フルートの鄙びた味わいの第2主題を加えて展開される。**第2楽章** ラルゴ、変ニ長調 有名な旋律がイングリッシュ・ホルンでしみじみ広がる。中間部（嬰ハ短調）は管楽器がコントラバスのピッツィカートとともに歌い、ヴァイオリンの豊かな旋律も印象的である。

第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ、ホ短調 ティンパニとトライアングルの強打で始まる民俗舞曲風の音楽。木管楽器が中心の中間部（ホ長調）は、軽やかに歌われる。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ、ホ短調 弦楽器の強烈な序奏に続き、トランペットとホルンの力強い第1主題と、クラリネットの穏やかな第2主題が提示される。これまでの三つの楽章の主題が回想され、堂々とした響きのなかで締めくくられる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ*、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル）、弦五部

*今回は指揮者の意向によりチンパンツで演奏します。